九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

障害福祉施設におけるものづくりワークショップのガイドライン構築 ： 芸術活動による余暇支援の充実とWell-Being向上を目指して

謝, 雪こう

https://hdl.handle.net/2324/7182474

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	謝　雪こう
論　文　名	障害福祉施設におけるものづくりワークショップのガイドライン構築 ～芸術活動による余暇支援の充実と Well-Being 向上を目指して～
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　長津　結一郎 副　査　　九州大学　　教授　　中村　美亜 副　査　　九州大学　　准教授　　伊藤　浩史

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、障害者の余暇支援と Well-Being の向上を目指した、福祉施設で継続的に実施可能な芸術活動をワークショップ形式のガイドラインとして提案するものである。

障害者による芸術活動は、障害者のアイデンティティや自己肯定感の向上、社会とのつながりの強化などの多様なポジティブな効果を持つことが示唆されている。文化庁は「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」において、文化芸術活動が持つ多様な人々を結びつける力を認識し、その推進の重要性を強調している。しかしながら、既往の全国調査によれば、障害福祉施設での芸術活動の普及はまだ充分とは言えず、施設での文化芸術活動の実施率の向上や、その推進をサポートする資源の確保が必要であると考えられる。本論文では、障害福祉施設における文化芸術活動を実施する際の施設や道具の制約、および専門職員の不足などの状況を踏まえ、「ものづくり」を中心としたワークショップを実施するうえでの簡便な方法を開発することを試みた。また、参加者の Well-Being の変化を定量的・定性的に分析することにより、ワークショップの効果検証に取り組んだ。こうした研究の方向性が、芸術に関する専門職員によるサポートが不足している状況でも、障害者の文化芸術へのアクセス権を確保することができることが期待された。

具体的には、まず国内外の文献の網羅的な検討ののち、実際の障害者福祉施設で実施されたものづくりワークショップの質的・量的の双方による検証を試み、障害者の変化とワークショップの影響を明らかにしている。その結果、ワークショップの継続的参加は障害者の Well-Being 向上に良い影響をもたらす可能性が示唆された。また障害者福祉施設ですでに芸術活動を行っている支援員等にインタビューを実施し分析することで、福祉施設で行う障害者芸術活動の改善策と方向性を考察している。具体的には主に「福祉施設におけるサポートの改善」、「専門人材不足により質の低い指導の改善」、「作品の評価体制の整備」、「商品化が可能な場合のサポートの充実」、そして「地域社会と施設間の情報共有と連携の強化」といった改善点を指摘している。

次に、ワークショップデザイン論を下敷きとしながら、福祉施設でのワークショップのガイドラインを策定している。さらにその検証を目指し、実際の福祉施設で再度ワークショップを行い検証した。定量的及び定性的な分析を通じて、ワークショップが参加者の Well-Being の向上に寄与する可能性が示唆された。

本論文の結論として、ワークショップが障害者の Well-Being の向上に有効であること、およびその効果を最大化するためのガイドラインの有効性について言及している。このようなワークショップを実施することが、障害者のコミュニケーション能力の向上や自他の受容の促進といった効果をもたらす可能性があると推察され、人材が不足している施設での導入・実施が可能であると示し

ている。

本論文は、筆者自身の個人的な経験を基盤とし、日本において実際に福祉施設で勤務しながら、福祉施設の現場でワークショップを試みた実践的な研究として、筆者の尽力とその成果は高く評価できるものである。また国内では当該分野において十分に試みられていない混合研究の視点を取り入れた点は、今後の研究コミュニティに一定程度の影響を及ぼすことが示唆されよう。一方、全国に広がる実践において当該実践がどのように位置付けられ意義を持ち得るのかという俯瞰的な視点や、構築したガイドラインが実践でどのように活用し得るのか、定量的なデータの分析の方法によってはこぼれおちてしまう視点があるのではないか、といった点には課題も残った。しかしながらそれをもってしてもなお、現在日本国内で隆盛する障害のある人の芸術活動に関して、芸術の非専門家によるワークショップ実践というこれまでにない焦点を当てたことによる価値は大きく、網羅的な文献レビューの章も含め、今後の当該分野の研究発展に一石を投じる論考となっている。

したがって本審査委員会は、本論文を博士（芸術工学）の学位に値するものと判断した。